

私の知っているボリビア

～青年海外協力隊員の視点から～

古 川 顕*

1. ボリビアに関する偏った知識やイメージ

ボリビアと聞いて何を思い浮かべるであろうか。日本の社会科や地理歴史科の教科書から見えてくるボリビアのイメージは、チチカカ湖や首都ラパスに代表される冷涼なアンデス高地、山岳の国である。国民の半数以上がインディヘナ（先住民）であり、彼らが山の斜面でジャガイモやトウモロコシなどを育て、リャマやアルパカを飼育して生活している。歴史的にはスペイン人支配のもとに栄えたポトシ鉱山が有名。恐らく多くの日本人がボリビアと聞いて思い浮かべるのは、このようなことであろう。しかし、ここに挙げたようなイメージは、この国の一面しか捉えていない非常に偏ったものである。

ボリビアの知られざる面を幾つか紹介しよう。ボリビアの首都はスクレ市と憲法で定められている。しかし、スクレには最高裁判所があるのみで、立法と行政の中心はラパス市にあり、ラパスが実質上の首都と言える。両市ではしばしば首都機能移転をめぐる衝突が起こっている。また、日本の学校で使用されている地図帳によると、首都はラパス、その海拔高度は3630m、4058m、4071mなどと教科書会社によってかなり幅がある。4058mという値は『理科年表』に載っている気象観測地点「LA PAZ / ALTO」の海拔であるが、この観測地点はラパス市に隣接するエル・アルト市(EL ALTO)のものだ。ラパス市は傾斜地のため計測地点によって大きく海拔が変わる。中央省庁が3600～3650m前後に多くあることを考えると3630mが妥当な数値である。富士山頂付近のこの高度において400mの差が人間生活に与える影響はとて大きい。

ボリビアの国土は日本の約3倍、そのうち約半分は熱帯気候区に属する低地だ。ここにはピラニアやワニ、ピンクイルカなどの生息するアマゾン水系の河川があり、世界屈指の豊かな生物多様性を有する熱帯林（セルバ）が広がっている。この熱帯林にもインディヘナが暮らしているが、先に挙げた高地のインディヘナとは生活様式や言葉が大きく異なることが多い。一口にインディヘナといっても言語で分類すれば30民族以上になる。ペルーからボリビアへ渡ってきた日本人移民の血を受け継ぐインディヘナもいる。なお、教科書に見られる「インディオ」という表現は、ボリビアにおいては差別表現なので使用しない方がよい。

ポトシ鉱山は歴史上有名であるが、錫や銀などを産出する現役の鉱山である。ただし、坑道が多すぎて、そろそろ山が崩れるのではないかとされている。命懸けになるが、現地のツアーに参加すれば鉱山内の見学が可能だ。海拔4,000mを越す鉱山内で、鉱夫たちがコカの葉を頬張り、疲労や寒さに耐えながら働いている姿を見ることができる。コカの葉は、坑内のあちこちに祀ってあるティオと呼ばれる鉱山の神（石像）にも供えられている。南米というとカトリックと思われがちだが、実際にはこのような土着信仰とカトリックが複雑に絡み合っていることが多い。

その他、ボリビアに関する一般的な情報は、真鍋周三編『ボリビアを知るための68章』（明石書店、2006年）に分かりやすく紹介されている。また、日本ではあまり知られていないボリビアの日本人移民について紹介している文献、岩槻泰雄の『外務省が消した日本人 南米移民

*元 公立女子高等学校教諭

2009年1月より国際協力機構(JICA)ジュニア専門員

の半世紀』(毎日新聞社, 2001 年) も一読をお勧めしたい。概説的な情報や日系人についてはこれらの本に譲り, 以下にはボリビアでの筆者の活動を紹介する。

2. ボリビアにおける環境教育

筆者は国際協力機構(JICA)の派遣する青年海外協力隊員(職種:環境教育)として, 2006 年 3 月からの 2 年間でボリビアで過ごした。勤務先はコチャバンバ県教育事務所であり, 同事務所は九州よりも少し広い県内にある全ての学校を管理している。

ボリビアの環境教育は, 1994 年の教育改革によりできた現行カリキュラムの中で, 人権やジェンダーなどと並ぶ横断的テーマの 1 つと位置づけられている。全ての教科において取り扱うことが求められているが, 公的な教科書等が無いため, 多くの教員は何をしたらよいのかが分からず困っていた。筆者に期待されたのは, 主として環境教育教材の開発と初等教育教員への指導であった。なお, ボリビアの初等教育は, 日本の小学校と中学校にあたるものが一緒になった 8 年間の義務教育である。

ボリビアなどの最貧国と呼ばれる国において, 環境教育は命に関わる教育だ。同国の 5 歳未満児死亡率は 61% と南米では最も高い(unicef, 2006, 日本は 4%)。1,000 人のうち 61 人が 5 歳の誕生日を迎えることができないのだ。開発途上国における乳幼児死亡の主な原因は下痢である。世界保健機関(WHO)によると, 世界では毎年約 130 万人の 5 歳未満児が下痢による脱水症状で命を落としている。下痢の主たる原因は, 不衛生な環境だ。汚れた水や食物の摂取, ネズミやハエなどが媒介する病原菌などが下痢感染症を引き起こす。環境教育により人々の衛生に関する正しい知識を増やし, 意識を向上させ, 少しでも不衛生な環境を減らすことが重要だと筆者は考えた。そこで, 数ある環境問題のうち, 衛生上様々な問題を引き起こすゴミ問題に特に

力を入れて活動した。

3. ボリビアの学校環境

ボリビアの学校環境には非常にばらつきがあるが, 私が勤務していたコチャバンバ県内の平均的な様子を紹介する。まず, 人口の少ない地方を除けば, 午前と午後, 場合によっては夕方の部と, 2 ないし 3 つの学校が同一校舎を利用している。学校名も教員も全く異なる学校だ。十分な学習時間がとれないばかりか, 児童労働の原因にもなっている。机や椅子などの備品は壊れているものが多く, また数も充分ではない。照明装置が少ないため, 教室は薄暗い。教室の中央に裸電球 1 つだけということもある。複数の照明装置が付いていたとしても, 幾つかの電球が切れているのが普通だ。窓ガラスも割れているものがところどころにあり, カーテンがない場合はガラスをマジックやペンキで塗るのが常套手段である。給水制限があるところでは, ドラム缶などに汲み置きした水で手洗いをするため, 感染症を媒介する可能性が高い。病気は欠席や成績低下につながる。どうして修理や補充をしないのかと尋ねると, 「壊したのは我々ではない」, 「市に請求してもお金をくれない」という答えが一様に返ってくる。ゴミがそれほど落ちていない学校もあるが, 大抵はゴミが目につく。校内の売店で売っているお菓子のゴミも多い。子どもが校内の掃除をする習慣はこの国にはなく, 掃除は身分の低い人がするものだという差別的な空気を感ずる。子どもの親, 場合によっては学校の先生までもが, 習慣的にゴミを道や床に捨てるのがこの国の現実だ。心ない教員たちの行動を変えないと学校は綺麗にならない。

4. 学校の環境改善のための試み

活動期間の前半は, 活動の基盤となる「環境」や「教育」に関わる情報の収集, 及び環境教育の一般的テーマを扱った教員向けガイドブック

の作成に力を注いだ。他の協力隊員と一緒に作成したこのガイドブックには、授業をするにあたり最低限必要と思われる基礎的な情報と授業例が載せてある。ゴミをテーマにした幾つかの授業をボリビア人教員に行なってもらった。しかし、予想していたことではあったが、授業は好評でも、校内に落ちているゴミがその後目に見えて減るということではなかった。子どもの行動を長期にわたって変えるには、ゴミの授業だけでは不十分だからである。ゴミをゴミ箱に捨てる、トイレに行った後に手を洗う等の行動は、なぜそのような行動が必要なのかを理解させるよりも、小さい頃から習慣づける方が先決だ。理解は後からついてくる。

学校でゴミをゴミ箱に捨てる習慣を子どもにつけさせるためには、頻繁に教員が指導するしかないを考える。学校全体での取り組みや保護者の協力も必要だ。活動期間の後半は、授業以外のアプローチ、学校の環境管理能力や教員の指導力の強化に力を入れた。

まず、校長や地区教育事務所職員を対象にした研修の中で、学校での衛生管理や環境整備の重要性を説いた。ゴミのポイ捨て以外にも、机や電球等の備品や水の管理まで、組織的に管理する方法を極めて具体的に紹介した。環境整備に必要な費用はリサイクルによる収益で賄えるよう、学校で簡単に導入できるリサイクルのルートを確認した。このリサイクルが学校周辺のスカベンジャー（有価物を拾い集める人）の生活を脅かさないようにも配慮してある。保護者向けには、子どもの健康に関わる資料、いわゆる「保健だより」を作成。これを約300校に配布し、コピーして使用してくれることを願った。

上記の活動と併せて、教員の指導力強化などのために『学級日誌』を導入した他、『ボリビアの子どもたちが仲良く暮らすための50のルール（邦訳）』（以下、ルールブック）という小冊子及びA3版カードを作成した。活動の規模としては、このルールブックが最も大きい。JICAの

「学校教育の質向上プロジェクト」や教育文化省の協力を得て、全国に点在する同プロジェクトの参加校約500校でルールブックは使用されている。この教材は群馬県教育委員会が作成したルールブックを参考にして、ボリビア人の教育関係者や美術隊員とともに作ったものだ。「早寝早起きをしよう」、「ゴミはゴミ箱に捨てよう」、「困っている人がいたら助けてあげよう」といった、小さい頃から身につけてほしい50のルール（主として基本的生活習慣や態度）が、イラストや簡単な説明文とともに載せてある。表向きは小学校低学年向けの教材だが、私のねらいは、教員や保護者の行動をも変えることにある。教員が子どもにこの教材を配付して指導するということは、当然、教員もこのルールを守らなければならない。私が教員たちに「ゴミはゴミ箱に捨ててください」などと分かりきったことを注意するよりも、子どもたちに見られているプレッシャーの方が、よほど効果があるだろう。また、家庭でこの本に目を通した親が、学校で指導していることを具体的に把握し、子どもと一緒にルールを守ることを期待している。各ルールを表現したイラストは、文字の読めない保護者たちの理解を助けるためでもある。またイラストには、今まで教材化されてこなかったジェンダーや人種・民族の視点も盛り込んだ。

50のルールのうち、衛生や美化など直接的に環境教育に関わるものはほんの一部である。環境に配慮した行動をとるようになるには、他の人々や未来の人々に対する「思いやり」の心が欠かせない。50の中には、この「思いやり」の心を養うためのルールも多数含まれている。まずは児童の生活圏である学校や地域を綺麗にする習慣を身につけ、その後、自分とは直接関係のない地域や未来世代の人々のことを思いやりながら行動できるようになって欲しい。このような願いをルールブックに込め、現地の同僚に託して帰国した。